高度経済成長期前後の葬儀変遷
家族・介護・看取りを視野に入れて

Changes in Funeral Practices before and after the High Economic Growth Period：Focusing on Families, Nursing Care of Parents, and Attendance on the Dying

倉石あつ子

KURAISHI Atsuko

はじめに
❶農家が農家でなくなったZ家の場合
❷Z家から嫁いだe Y家の場合
❸典型的な専業農家X家の場合
❹長野市におけるW家の場合
終わりに

【論文要旨】

長野県内では，長野市などは1930年代には既に火葬が行われているが，本稿で主として取り上げるZ家の位置する中信地域では，場所によっては1970年代に入って初めて火葬が取り入れられる。火葬が取り入れられることによって，葬儀の進め方の順序に変化が生じる。また，葬儀は地域集団の手を借りて行われていたものから，家によっては1970年からホテルなどを借りての葬儀が行われ始める。地域集団や同族集団が中心になって行っていた葬儀が，そうした人々に迷惑をかけたくないという喪主の意向などによって，自宅葬から葬祭場などを利用した葬儀への変化を見せ始める時期として捉えることができる。もちろんこの背景には高度経済成長期以降，忙しく働くサラリーマンや共働き家庭などが一般的になってきたという社会的背景があることはいうまでもない。また，2000年代に入ると，死者の多くは病院や特別老人養護ホームなどで亡くなることが多くなってくる。本稿ではこうした変化を長野県中信地方に暮らすZ家を中心に，Z家と姻戚関係で繋がる家々，13例の家族のあり方の変化と，それに付随する介護・看取り（臨終のあり方）の変化に視野をひろげて報告する。それらの事例を通して見えてくるものは何かを整理してみると，自宅で死を迎えていた時代から病院や施設で死を迎える時代へと変わるにしたがって，葬儀をおこなう場所も変化し，葬儀の会葬者の規模にも変化の兆しがみられることを読みとることができる。そして，改めて葬儀は誰のために行われるのか，という葬儀のあり方の本質的な部分を問い直し，考え直す時期を迎えていることに気づかされる。

【キーワード】介護，死に水，通夜，湯灌，火葬，遺骨

はじめに（問題提起）

近年，亡き人を送る場合，家族のみで，あるいは親族のみで，あるいは密葬にして・・・といったやり方をよく耳にすることがある。高度経済成長期という第二次世界大戦後の日本という国を立てなおそうと一生懸命働き，その目的をほぼ達成したのち，ふっと周囲を見回すとかつて行われていたことは行わないあるいは行えない状況になっている。人の最後を介護し看取り送るという一連の行為や儀礼も，当たり前に行われていたことは当たり前ではなくなった。かつて，理想とされた「家族に見守られて畳の上で死にたい」という願いは，ほとんど不可能と言ってもよく，むしろ誰の厄介にもならず健康で過ごしてころりと死にたいという時代に入っている。何人もの人を看取り，見送ってきた世代が，自分たちは誰の世話にもならないように「死にたい」と願う時代になっているのである。

こうした意識は，今，介護や看取りや葬式の行い方を変えつつある。本稿では，そうした変化を捉えるために，まず，一戸の家をめぐる事例から派生させて，現状を明らかにすること，そして，そこに至るまでの変化の過程を捉えてみたい。聞き取りの内容がかなり個人的な部分にまで言及されているので，個人が特定できないよう調査地・個人名等の記述には配慮をしたつもりである。

❶……農家が農家でなくなったZ家の場合

1）Z家プロフィール

松本市の山裾（旧東筑摩郡）に位置するZ家は1961（昭和36）年夏まで兼業農家であった。サラリーマンのfは休日に野良仕事を手伝うが，普段はc・d・gが中心に農業を行っていた。

稲作・畑作・養蚕を主たる生業とする平均的な農家であった。ただし，gが虚弱体質で無理がき

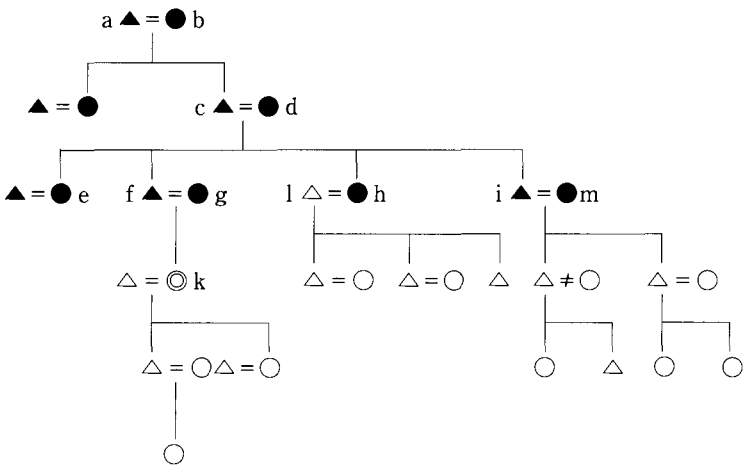

図1　Z家の家族構成（黒は調査時点で既に死亡。◎は話者）

かなかったこと，1951年ごろcが脳梗塞で倒れ半身不随になってしまったことから，集落内のある家の主人を日雇いで頼むことが多くなった。dは隣りのN村（現松本市）から1908（明治41）年に，gはI村（現松本市）から1941（昭和16）年春に婚入した。gの婚入当時はb・c・d・h・iとg夫婦の3世代が同居していた。1947年にhが婚出し，48年にiがe夫婦の養子となった。[(1)] また，g夫婦に子供kがうまれ，家族構成に変化が見られた。kが生まれた10年後にbが亡くなる。

Z家は昭和10年代初めごろ，曹洞宗から神道に改宗したので，bの葬式は神道で行った。また，改宗に伴い墓も旦那寺の裏にあったものを，新たに本家の畑の一部をもう一軒の分家と共に分けてもらい，墓とした。したがって，盆などには寺の裏と新たにできた墓と両方にお参りに行くことが何年間か続いたが，fの代にcと相談の上，寺の裏にあった墓の遺骨と土を現在の墓に移し，寺の裏の墓の権利は放棄した。したがって，bが実際には初めて新しい墓に入る仏となった。

なお，高度経済成長期以前までは，この地域は土葬であり，土葬当時の葬式の流れは，臨終を迎えると，タマヨビ　死に水　組に知らせる　枕飯・枕団子　庚申講の仲間が葬儀の準備　湯灌（通夜）　納棺　（この間に墓穴掘りを隣組で行う）　告別式　出棺　（火葬）　野辺送り　埋葬　精進落とし　七日目ごとに墓参り・供養　四十九日　というような手順で行われるのが一般的であった。昭和30年代中ごろからこの地方でも火葬が行われるようになり，火葬によって，告別式前に火葬場に行き，告別式は骨葬で行われること，四十九日まで遺骨を家に置き，四十九日にお骨を墓に納めるように変化したことである。また，葬祭場で葬儀を行うことによって，＝＝＝の部分はなくなり，＿＿＿の部分は葬祭業者が行うようになった。また，近年は出棺に際し，「最後のお別れをどうぞ」ということで，出棺を見送るために残った人は好むと好まざるとに関わらず，「最後にもう一度死者の顔を見る」という儀礼が行われる。参列者の中には「いいよ＝見たくない」という人もいて，特に不特定多数の参列者がある場合は，この儀礼をおこなう意味を疑問視する人も多い。

この外にもこまごました部分での変化はあるが，それは事例の中で述べて行くのでここでは触れない。人の最後はその家の暮らしぶりや経済状態，家族構成などによって大きく変化する。ここでの事例は松本市郊外に暮らすZ家の家自体の変化を中心に捉えていくこととする。

2）Z家の変化と葬式の変遷

①fの祖母bの場合

bは1955年死亡。享年93。gが婚入後，Z家での初めての葬式である。人が亡くなると，「目を落とした」などといい，手伝いに行くときには「不幸ができたので」とか「葬式になってしまった」などの言い方をする。昭和50年代終わりまでは，自宅で葬式を行うのが一般的で，葬式はオコシンナカマ（庚申講のメンバ＝隣組）から夫婦で手伝いに出た。隣接する庚申講[(2)]からは一人ずつの手伝いが出た。その後寺で行うような家も出てきたが，そうなっても湯灌・納棺までは自宅で行うことが多かった。

bは1863（文久3）年の生まれ。aの親たちが分家したので，二代目にあたる。本家は同じ組内にあり，オコシンナカマも同じである。bは亡くなる三日ぐらい前から食欲が落ち，床に伏せる時間が多くなり，寝ついて三日目ごろ仲の良い女友達の見舞いを受けた数時間後に自然に息を引き

取った。食欲が落ちていたので，家族が注意していて嫁であるｄが死に水を取った。自室で息子夫婦・孫嫁・曾孫に見守られながら亡くなったが，ｃの姉やその子どもたちまで来ていたかは，ｋには記憶がない。医師は死亡後診察に訪れて死亡診断書を書いてくれた。また，屋根に上って行うような魂よばいなどはおこなわなかったが，その場に居た人々が「おばあさま，おばあさま」と呼んだ。孫４人のうちｅ夫婦とｉ夫婦は東京在住なので，電話や電報で知らせたが，臨終には間に合わなかった。

死亡後，遺体は自室（離れ）から母屋の座敷に移され，北まくらに寝せた後，遺体の上には短刀を置いた。枕元には枕団子と枕飯を供える。一方，葬式の準備は庚申講の仲間のうち年長者が指図をし，喪主と相談の上葬式の段取りを整える。お勝手は講の女性たちが担当し，葬式用の献立[(3)]をやはり年長者が指図して準備する。

式当日は，墓穴掘りも所属の講の仕事としてあり，３人ぐらいが当たった。墓所は決まった範囲なので，前に埋めた所を掘らないように避けるのだが，時には前に亡くなって埋めた人の骨が出てきたり，一緒に入れてやった酒の一升びんがそのまま出てきたりすることもあったという。

亡くなって一定の時間が過ぎると（ｋは何時間だったか忘れたという），湯灌をし，遺体を棺に納める。ｂの時には縦棺でひざを曲げたような形にして納棺するので，死体が硬直してしまってからではそれができなかったから，そんなに長い時間放っては置かなかっただろうという。死に装束は晒しで作ったが，嫁や娘・孫・孫嫁などが縫った。カタビラ・ヅダブクロなどで，足袋は使っていた白足袋を穿かせた。ｂの場合，死ぬまでメガネなどを使っていなかったので，棺の中に特に好きなものを入れるというようなことはなかった。また，湯灌という言葉はあったが，通夜ということは言わなかった。

葬式は，子供・孫・曾孫・甥・姪・従兄弟・姻戚関係（親の生家・娘の嫁ぎ先の親・兄弟・本分家，嫁の生家とその分家，孫嫁の生家とその分家など），子供・孫などの擬制親，子供の付き合い関係，孫の勤務先関係など，かなり広い範囲の人々が参列して行われた。神主が一人だったのか複数だったのかは覚えがないというが，お経と祝詞が違うだけで，他の手順は違いがなかった。お墓まで行くときの葬列の順序も，仏式の家と差異がなかった。ただ，このあたりではジャンボン道などというようなものはなく，行きも帰りも同じ道を通った。藁草履をはいて行って緒を切って棺桶と一緒に墓に埋めてくるものだといわれているが，ｂのときにそれを行ったかどうか，ｋは記憶にないという。

墓から帰ると塩と糠で手を洗って，精進落としの席に着いた。ｇの生家では，枕団子の皿を糸巻き枠の上に供えておき，出棺するとその枠を外に蹴りだすが，Ｚ家のあたりではそうしたことはしていない。

写真１　Ｚ家の本家の昭和10年代の出棺の際の写真である。ｂの頃までは出棺，野辺送りなどはさほど変化がなかったという。

告別式翌日は隣組の慰労会を行い，使用した什器を片づけ宝蔵に収めた。

bは93歳という当時では珍しいぐらいの高齢だったために，村の助役が香典をもってお参りに来たことが，他の家とは異なる点であった。夫aの葬儀の折（1924年）には123人の参列者と弔電1通の記録があるが，25年後のbの葬儀にも127名の参列と弔電4通の記録がみられる。また，aのときの忌中払い（精進落とし）の献立には見られなかった鯖や小鰺などの青魚の使用がみられる。

②gの義父cの場合

cが1964年8月死亡。Z家にとっては初めての火葬である。bの葬式後，10年近くを経て，Z家は1961年夏，松本市から塩尻市の住宅街に転居する。農業の中心となっていたdが盲腸の手術後の経過が良くなく，農業ができない状態になってしまった。更にgも盲腸の後，腹膜炎をおこし半年近くの入院を余儀なくされたため，家族が相談の結果，農業をやめる決心をする。gは農業をして体を酷使するより，得意な和裁の腕を活かして生活費を補うことにした。屋敷続きにdのための畑を確保し，季節の野菜を楽しみで作ることにした。こうして，Z家はマチでのサラリーマン家庭へと変化を遂げる。

cは亡くなる半年ほど前から痴呆の症状があらわれ，食事を何度も要求するようになった。しかし，内臓は特に悪いところもなく夏を迎えたが，8月に入る頃からなんとなく体力落ちていった。東京在住の子供たちは毎年夏休みに遊びに来るので，特に知らせることもなく来る日を待っていた。e夫婦・i夫婦とその子供たちが次々にやってきた。そうした中，8月半ばのある日，朝ごはんを無事済ませ自室に戻ってしばらくして，皆が遊びに出かけようとしているうちに，急に容体が悪化し，医師が駆け付けるのも間に合わないほどに亡くなった。したがって，家族はもちろん，普段は遠く離れた都会に暮らす子供や孫に看取られて臨終を迎えた。むしろ，松本市在住のh夫婦とその子供たちが臨終に間に合わず，亡くなってから駆けつけた。

写真２　Z家で行った自宅葬の最後。cの祭壇

写真３　cの新盆のしつらえ

新居住地は新興住宅街であったが，出身は近在の家が多く，旧居住地の習俗とあまり変化はなかった。庚申講はなかったが，10戸ほどの隣組が機能

しており，葬式は隣組が中心になって取り仕切った。互いに手伝いに行ったり来たりしたが，多くの家は二男などが新たに土地を買って家を建てて居住したので，3世代同居などの家はほとんどなく，Z家がこの隣組にとって初めての葬式を出した家であった。ただ，他の家々も近在の出身で，それぞれの生家や本分家などの葬式の手伝いを経験しており，手順も習俗も戸惑うことはなかった。組のなかの最年長者夫婦が中心となって指図をし（組長とは異なる），賄いの経験がある女性が食事の分量などをアドバイスして，葬式の準備は旧居住地にいたころと同じように進められた。

神主は新居住地のある集落の氏神の祭りを務める神主を頼んだ。湯灌・納棺・葬式とも自宅で行った。湯灌をする前に神主が来て祝詞をあげ，納棺したが，この時の棺は寝棺であった。fの勤務地が塩尻であったため，いろいろな情報を収集できていたことと，新たな地だからと言っても前住地と特に異なるような習俗はなく，ことさら困ることはなかったという。

弔問客としては，子供夫婦・孫・姉妹・妻方を含む甥・姪・従兄弟・姻戚関係（親の生家・娘の嫁ぎ先の親・兄弟，嫁の生家など），当人夫婦および子供の擬制親，子供の勤務先関係，旧居住地の庚申仲間の家々，旧居住地の俳句仲間や友人などbのときに比べ，かなり人数が多かった。ただし，cの音信帳を紛失してしまったため，参列者の数等の確認はできない。

なお，出棺に際しては神主に祝詞をあげてもらった後，火葬場に行き，骨にしてから告別式を行った。また，告別式当日お骨を墓に納めに行ったように記憶しているという。

③gの姑dの場合

dは1973年2月心筋梗塞で急死。朝起きて洗面などを済ませ普段と変わりなく見えたが，朝食の整ったことを知らせに行くと亡くなっていた。医師と警察が駆けつけ，一応検視を行った。あまりに急であったために，誰にも看取られることなく自室で亡くなった。e夫婦・h夫婦・i夫婦や孫たちは，知らせを受けてびっくりし，とるものもとりあえず駆けつけるという状態であった。

湯灌と納棺は自宅で行い，告別式は駅前の旅館を借りて行うことにした。旅館を借りたのは，Z家ばかりがたびたび葬式を出し，隣組の手を煩わせたり，勤め人に何日か休んでもらうのが申し訳ないということからであった。したがって，葬式当日は隣組の家々も式場に来てもらうようにし，葬式当日の手伝いはf夫婦の擬制子（4組ほどの夫婦の仲人をしていた）が中心になって行ってもらうように手配した。弔問客は子供・孫夫婦・曾孫・夫方を含む甥・姪・従兄弟・姻戚関係（親の生家・娘の嫁ぎ先の親・兄弟，嫁の生家など），当人夫婦および子供の擬制親子，子供の勤務先関係，旧居住地の本分家関係などで，cのときと同じぐらいの参列者があったのではないかという。音信

写真4　d新盆の折の接待席
盆に近い土日に神主を依頼し，祝詞奏上の後，集まった親族で供養の席を囲んだ。新盆のしつらえはcの折と変わらなかった。

帳に記された名前は195名，弔電の数は不明である。ｃの葬儀の折にはｋはまだ結婚しておらず，ｋの姻戚関係の付き合いは発生していなかったが，ｄになるとｋの姻戚関係がｃの時のメンバーにプラスされて参列者数が増えていると思われる。

ｄの場合，湯灌・納棺・翌日午前中火葬場・昼から告別式・精進落としの順で行われた。また，納骨は五〇日祭を行った当日に行われた。

④ｇの夫ｆの場合

1976年9月病院にて59歳で死亡。湯灌・納棺は自宅で行い，告別式はｄ同様旅館の広間を斎場・精進落としの場として借りて行った。3年ほど定年を繰り上げて迎え，定年（実際は自主退職）後10ヶ月後ごろから入退院を繰り返した。ｇが付き添い，危篤の知らせを受けて駆けつけたｋ夫婦とその子供たちに看取られて臨終を迎える。死に水は，看護婦（当時）の指示で脱脂綿で唇を濡らす程度で，ｇとｋがおこなった。そのほかのことは何もすることがなく，清拭を行う時に浴衣からウールの着物に着替えさせてもらった。長病みだったからこそ寝巻のようなものではなく，きちんとした着物で送りたいというのは，ｇの希望であった。湯灌をする必要もないほど綺麗に清拭された遺体で帰宅した。Ｚ家としては病院で死亡した初めての例である。

ｆは入退院を長く繰り返しており，最後の一ケ月は癌末期特有の「痛い」という言葉を繰り返し，痛み止めの注射を打つしか手がなく，ｇは生前，「自分もあんな風になると嫌だ。痛くても周りはどうしてやることもできない。あんな風に病みたくない」と言っていた。危篤に陥った時にはｇは長い看病の果てだったので，締めきってある家を開けに行かなければ，という程に覚悟を決め気丈に振舞っていた。実際にｇが家を開けに行くことはせず，死亡の知らせを受けて隣組・擬制子が自宅を開け，遺体を迎える準備を整えてくれた所に帰宅した。ｃ・ｄの場合同様，隣組の人の手を借りたが，葬式当日はｄと同様旅館の方へ出向いてもらうことにし，家には擬制子の一人が留守番として残った。

弔問客は子供ｋ夫婦と婚家の両親・ｋの夫の兄弟姉妹・ｋの夫の叔母たち，ｆの兄弟姉妹夫婦とその子供夫婦，ｇの弟夫婦とその子供夫婦，ｆおよびｇの従兄弟従妹，ｆの祖父母の関係者，旧居住地の庚申仲間，ｆ夫婦の擬制親子，ｋ夫婦の犠牲親，ｋの夫の勤務先関係，本人の勤務先関係者，友人，知人などｂ・ｃ・ｄのときをはるかに超えた多様な参列者であった。定年後間もないこともあり，また，本人がまだ若かったこともあって友人や知人の参列も多かった。

喪主はｇが務めるべきであったが，看病疲れと世慣れないからという理由でｋの夫が務め，叔父ｉとｋがそれを補佐した。湯灌・納棺・翌日火葬場・

写真５　ｆの神葬祭

告別式・忌中払い（精進落とし）の順で行われた。神主はｃ・ｄと同じ神主を依頼した。火葬場にいって来てからの告別式なので遺骨を祭壇に飾っての告別式であった。

五〇日祭は兄弟姉妹夫婦とその子供・子供夫婦と孫・従兄弟たち・擬制子など人数を絞って行われた。出席者に関しては資料２を参照すると分かるように，250名を超えている。ｋによれば，一般的なサラリーマンの葬儀としては規模が大きな方だったのではないかという。

⑤ｇの場合

ｇは2008年12月特養で容体が悪化し，提携している病院に運ばれたが，病院に到着したときには既に死亡していた。ｋ夫婦は東京在住の為とｋが当時仕事上のつごうですぐに駆けつけることができず，翌朝松本に到着した。その間に，特養の事務長（ｋの同級生）がｋと電話でやり取りした後，葬祭業者に依頼し，葬祭場の通夜室に遺体を移動した。ｇの生家やｋの従妹（Ｘ家のｐ）に，お参りだけしてくれるよう連絡した。翌朝ｋおよびｋの家族が到着した時には既に，ｇの遺体は二間続きの通夜室（座敷）に北まくらに安置され，枕元には花や枕団子や枕飯が供えられていた。必要な供え物は全て斎場が準備してくれた。

ｋが到着すると同時に葬祭業者が打ち合わせにやってきて，宗派を確認。神道であることを確認すると，契約している神主に連絡し，神主の都合を聞いて，通夜・告別式の日時を打ち合わせた。同時に通夜や告別式の規模（どのくらいの範囲に知らせるか，参列者がどのくらいあるかなど＝ｋはごく親しい親族だけで行うことにする）を確認すると同時に，祭壇や料理などの値段を相談。また，死亡通知を新聞などに出すか否か（ｋは出さないことに決定），遺影にどのような写真を使うかなどを打ち合わせた。写真は近年のきちんとしたモノがないので，ｋの息子に息子の結婚式の時の正装した写真を持参するよう指示し，それを祭壇の写真（遺影）とした。

一応の打ち合わせがすみ，一息入れていると男女の納棺師がやってきて，納棺できるように準備をするという。およそ１時間かけて顔を中心に化粧をし，生きているようなつやつやした肌に整えて，白装束を着せ再び安置された。ｋによるとあまりにも皺がのばされ，つやつやした肌にチークまで入れられて，「おばあちゃん（母）じゃないみたいで，納棺師の存在を知っていて興味があって依頼してみたけど，依頼しなければよかった」仕上げであったという。

亡くなった翌日の夕方，神主がやってきて祝詞をあげ，通夜式が行われた。神葬祭なので線香は立てず，ローソクの火を切らさないようにという注意をして通夜式は終わる。通夜は別宅で行うことも考えたが，遺体をあちこち移動するより，葬祭場の通夜室で家族が一緒に過ごした方が良いということになり，通夜も葬祭場で行うことにしたという。

部屋についているだけの布団は使っていいとのことで，５組ついていた布団を全部使用し，ｋの義妹も泊まることになったので，足りない分の１組の布団は隣りの通夜室から借りて使用した。部屋ごとに風呂が付いており（トイレは共同），ホテル並みの設備の部屋であった。

翌日は朝９：00に出棺　12：00から告別式ということで（火葬場の都合によって時間が決まるらしい，という）予定通り，９：00に出棺した。棺の蓋をする前に，顔のまわりやほぼ全身に花を飾り，燃えるもので故人の愛用していたものを入れるよう指示がされる。自分で仕立てた好きな色の着物で故人がよく着て歩いた着物を入れた。

参列者は子供夫婦，孫夫婦と曾孫，ｇの義妹の夫とその子供たち，ｇの弟の妻とその子供たち，ｋの夫の妹と弟，孫の妻の親，斎場近くに住むｆの従弟従妹たち，ｇ夫婦の擬制子などごく身内の近しい人たちだけであった（資料2)。これはｋ夫婦が親しい身内だけでゆっくり送りたいという気持ちと，ｆ・ｇの実の兄弟姉妹が故人であること，その連れ合いたちも高齢になってきていることなどを考慮し，今後の付き合いが負担にならないようにということを考えてのことであった。また，以前から松本で行うと決めていたが，それもｇの生家や甥・姪など関係者がみな松本付近に在住しているためである。

30人余の参列者の為，ほとんど全員が出棺から精進落としまで一緒に移動するという状態であった。

ｋは，ｇの葬式に関してかねがね，ｂ・ｃ・ｄ・ｆの折のような葬式はしないと決めていた。ｇが自分の貯めた金と保険金の範囲で葬式をすればいいと言っていたためと，かつてのような広い範囲の親戚・縁者を呼ぶことは経済的にも無理だと感じていたからである。ｇの夫の葬式の折には，まだ定年後間もなかったこともあり，かつての勤務先の関係者も多数参列したが，ｇの場合，家庭に入っていた人であるためそうした付き合いはなかったからである。また，ｋの夫がすでに年金生活に入っていたこともあって，なるべく葬儀費用を抑えたいと考えたからである。ともかく，家族が中心となって看取ってあげることができなかったｇの最後を，静かに見守り送ってあげたいと考えたという。

ただ，一方では，家族としては死者がそうした葬式のやり方に満足しているか，とか，一生懸命働いてきた人に対してこれでいいのか，という不安もあったという。

葬式が終わってから，遺骨は東京の自室にしばらくとどめ，更に松本市近郊の別宅にしばらく安置したのち，50日祭と新盆を兼ねて納骨（ｇとｇの夫の兄弟およびｇの娘の夫とその妹弟で納骨)。納骨後駅近くのホテルで会食し，今後の年忌法要は家族のみで行うことを出席者に了承してもらった。

以上，Ｚ家の葬儀に集まる人々の移り変わりは，既に拙稿[(4)]で述べたが，音信帳からもその様子は知ることができる。Ｚ家にはｂの父親の代からの音信帳が残されているので，本稿に音信帳の部分は初期のものと最後のものを資料1，2として採録した。

❷……Ｚ家から嫁いだｅ Ｙ家の場合

ｅはｆの姉である。したがって，生家はＺ家である。Ｙ家[(5)]はｇの生家の隣ムラにあり，ｅの夫はＹ家の8人兄弟姉妹の三男である。松本で商業学校を出た後，上京して日系二世のアメリカ人の洋服屋に弟子入りし，独立して東京の神田に店を構える。1935年ｅと結婚。第二次世界大戦末期，夫は応召。空襲がはげしくなってｅは生家であるＺ家に疎開。夫の帰りを待ち終戦を迎える。神田の店は空襲で焼けてしまい，戦後しばらく，夫の生家であるＹ家の離れに住まうが，1946年末に目黒区内に家をみつけ，紳士服の仕立屋を再開する。1980年ごろ仕事を辞め，弟であるｆの家に仮住まいする。ｇはｆの死後，ｋの婚家の敷地内の離れに引っ越し，ｆの家は空き家になっていたため，仮住まいとしたのである。2年後松本市内の夫の生家に近い場所に家を新築後，そこで暮ら

す（ｆの家は他人に貸すことになる）。しばらくは，身うちの洋服だけ頼まれれば縫っていたが（買い置きの生地もあったため），それも70歳代中ごろからは辞めて，夫はゲートボール，妻は俳句などの趣味の会に参加して過ごしていた。ｅ夫婦には八ケ月ぐらいで流産した女の子のお骨があるため，家を新築すると同時にＮ霊園墓地に墓を購入。女の子の遺骨はそこに納めた。

1）ｅの夫の場合

ｅは2005年春ごろ，散歩中に転んだのをきっかけに歩けなくなり，その後痴呆の症状も見られるようになったため，近所に住むｅの夫の甥Ｕが妻の方を特養に入所させようとしたが，妻は拒否。ヘルパーの手も借りず，ｅは夫に買い物を頼んだり，伊那地方にいる別の甥の妻がたびたび訪ねてくれたり，ｅの従妹が訪ねてくれるのを頼りに，何とか生活していた。しかし，そうこうしているうちに夫の方が体調を崩し，病院で紹介された特養に入所。2006年春ごろのことである。

ｅの夫は2007年３月，肺炎を起こし，施設内で死亡。自宅には運ばず，直接，葬斎場に運び，葬祭場のマニュアル通りの通夜・告別式を行う。

通夜・告別式を中心になって行ったのは，Ｕである。通夜・告別式の参列者はｅの夫の弟姉妹（8人の兄弟姉妹）と甥や姪，及びＵの兄弟とその子供，ｅの兄弟姉妹とその子供たち（といっても既に実の兄弟姉妹は死亡し，妹の夫とその子供及びｋである。ｇは施設に入居していて通夜・告別式に出られる状態ではない），ｅの従兄妹，特に親しくしていた隣家，及びゲートボール仲間である。ｅ夫婦には法律的な養子がいたので，養子にも死亡を通知し，通夜には間に合わなかったものの，告別式には出席した。その告別式に至るまでの流れは註４のようである。また，これらの事を知らせたのは，ほとんど電話を使って（携帯電話も使用）であり，留守電になっている場合はＦＡＸも使用した。

通夜の席上，Ｕ夫婦とｋを中心に

○49日はＵと家族で行うこと

○１年祭は行わず，新盆を兼ねて墓参りをしてもらいたいこと（実際にＮ霊園の墓にお参りした後，松本市内の寿司屋で食事をして解散した）

○ｅの夫の葬式はｅの夫の甥であるＵが中心になって行ったので，ｅの葬式は，ｅの姪であるｋが中心になって行うこと

などが話し合われ，親族間で了解された。新盆の祭の出席者は，ｅの夫の兄弟あるいはそれに代わる甥・姪及びＵの姉妹とＵの家族及び子どもたち，ｅの妹の夫，ｋなど20名ほどであった。

妻であるｅはまだ存命であったが，夫の死亡も認識することができないほどに痴呆が進み，葬儀には参列できなかった。黒のスーツと黒のベルベットのコートは夫が亡くなったときに着なければならないと言って取っておいたものだというが，スーツやコートを着て見送ることはできなかった。

2）ｅの場合

ｅは結局，夫が入所して一ヶ月後ごろ，夫とは別の特養に入所した。入所の頃には痴呆がかなり進んでいた。2008年１月誤飲がもとで肺炎を起こし，市内の病院に入院。2008年３月，病院内で死亡。このときも，知らせを受けてＵ夫婦が病院に駆けつけたが，臨終には間に合わない状態であっ

た。従って，夫同様親族に死に水をとってもらうことはなかった。死後は，夫同様，家に運ぶことはなく，葬斎場に直接運んだ。

ｅの夫の葬式の折に申し合わせた通り，姪であるｋが中心になって葬式を行った。ただし，ｋは東京在住の為とｅ夫婦の財産の管理はＵ夫婦に任せてあったため，葬祭業者との交渉・事務的な手続きはＵが行った。ｋが行ったのは，葬式の連絡をどこにするかをＵと相談して決めたこと，通夜をｅの従弟と行ったこと，喪主を務めたことなどである。したがって，葬式や精進落としの際の挨拶はｋがおこなった。参列者はｅの夫のときとほぼ同様だが，弟の家に仮住まいしていたときに行き来していたｇ夫婦の擬制子なども参列した。

納骨は夫と同様，甥家族が中心になって行ってくれることになり，新盆の通知も行ってくれることになった。新盆に集まったのは，夫のときと同様のメンバーである。

ｅの新盆のときに話し合われたのは，３年祭以降の祭祀は，甥家族が受け持つが，折々の墓参りは皆が心がけてほしいということであった。したがって，ｋは自分の家の墓参りの際には，途中にあるＹ家の墓参りも必ずしている。

また，ｅが亡くなったことにより，ｅの家族は誰もいなくなったので，ｅ夫婦の所帯道具などをどうやって処理するかが，新盆の直会の席上において親族間で話し合われたが，Ｕの姉妹たちはＵに任せると言い，ｋも全てＵに任せることで了承された。ｅの妹の夫も異議を挟まず，了承された。ｅ夫婦の家屋敷は養子にかわってＵが買い取る形になっており，ｅ夫婦の生前からＵがなにかにつけてｅ夫婦の面倒を見て来ていたことを親族は皆承知しているので，何の問題もなく了解が得られた。ｅ夫婦の家屋敷は，すでに名義がＵの名義になっており，相続などの問題も発生しなかった。もし，養子が権利を主張しても，弁護士に任せることにし，Ｕもｋも直接養子と交渉することはしない，ということも了承された。

❸……典型的な専業農家Ｘ家の場合

Ｘ家はＺ家のｇの生家である。松本市近郊の専業農家で，稲作・畑作のほか，戦後しばらく乳牛をかったりした後，ブドウ栽培に転換し，ｎは地域の中で一番味のいいブドウを作るといわれる人であった。宗派は真言宗。隣り集落のＴ寺の檀家である。

ｔの葬儀は1985年に自宅で行われた。胃癌で入退院を繰り返していたが，最後は自宅で迎えた。娘ｇの夫ｆに先立たれたことはｔにとってはショックで，「替ってやれればいいのに」ということを何度も繰り返していた。ｎが事故で入院したり，その後の体調が思わしくなかったため，またｎにも先立たれるのではないかという恐れがあったようだという。しかし，幸いそうはならず，ｏに抱かれるようにして逝った，という。ｏは自分の腕の中に抱き，死に水を飲ませたというが，そのことに対して，嫁として姑の最後を看取れた，嫁の務めを果たせたことに満足しているとのことであった。

遺体は座敷に北枕に安置され，遺体の上には剃刀などの刃物がおかれた。枕元には枕飯と枕団子が供えられたが，枕団子は糸とり枠の上に供えられ，出棺のときに糸とり枠は蹴とばして外に出され，遺体のあった場所は箒ではかれた。

tの葬儀は自宅で行われ，隣組の人々の手伝いのもとに手順通り行われたが，火葬になっていたので，火葬場に行って骨にしてから告別式を行うというふうに変化していた。また，tの折には，告別式が行われた後，遺骨が墓に納められたので，土葬のときのように告別式に参加した人々が行列を作って墓までお骨納めに行った。ただし，旗などの作りモノをもっていくようなことはなく，生花や紙花などをもっていった。墓から帰ると米糠と塩を混ぜた清めの塩が玄関口に準備されており，それで手を洗ってから家に入り，精進落としの席に着いた。料理は，かつては隣組の女衆が作っていたが，この時には農協の仕出しをとり，隣組の女衆にあまり労力をかけないよう，という気づかいをしていたという。若い世代は夫婦共働きも多く，何日も手伝いに来てもらうのも申し訳ない，という気持ちが生まれ始めている頃であった。

nが亡くなったのは，2007年4月のことである。15年ほど前の交通事故の怪我がもとで，野良仕事ができなくなったのをきっかけに次第に体調を崩すようになった。最後は家からそう遠くない市内の病院で息を引き取った。病院であったため，特に妻や娘が死に水を飲ませるというようなことはなかった。家に帰ることはなく，そのまま葬祭場に遺体を運んだ。通夜式は葬祭場で行い，親族・親戚・隣組などが参加した。翌日の午前中に火葬場に行き，遺骨を祭壇に飾って告別式を行った。このへんの習慣で，告別式の途中で弔辞の朗読をおこなうことが多いが，nのときにも果樹組合の仲間，老人会の仲間が弔辞を読んだ。

告別式の受け付けをする人々を帳場というが，この役をする人々は隣組の中で決められる。かつては筆字の達者な人がこの役を務めたが，現在は参列者自ら名前や住所を記載することになっているので，受付は適宜選んでいるという。

告別式が終わると，続いて初七日の法要が行われ，その後精進落としの席（忌中払いという）へ移動する。かつては参列者全員が精進落としの席に着いたので，個別のお膳ではなくとり回しができるように料理が大皿などに盛られていたが，現在は個別のお膳になっている。かつては，てんぷら，あぶらげとこんにゃくの刺身（油揚げもこんにゃくも甘辛くよく煮たものを短冊形に切って和がらしを添えておく），きんぴらごぼう（人参は入れない），豆腐の入ったヨセ（緑色などにする），煮物，海苔巻きまんじゅうなどが一般的な献立で，これらは隣組の女衆がつくった。現在は葬祭場で提示されるランクに従って，その家の経済状態によりお膳の内容が決められる。かつての献立には絶対にみられなかった刺身などが付く場合もある。葬式饅頭や餅が供物として死者の霊前に供えられ，それらの供え物は参列者に数個ずつ分配されるが，それとは別に海苔巻きまんじゅう（寿司の海苔巻きのかんぴょう部分にあんこが入っていて，ご飯の代わりに饅頭生地が使われている）がお膳に付くのが，このあたりの習慣である。

tの場合は告別式の日に墓にお骨を納めたが，nの場合は四九日間，自宅の床の間に祭壇を設け，そこにお骨を置いて，四九日に墓にお骨を納めた。四九日はnの子どもたち，oの兄弟姉妹，近所の分家のみで行い，納骨後ちょっとした食事をして解散した。

oは葬式後，kやpに対して，サラリーマンの妻であるg（義姉）と自分の夫nの介護の仕方を比較し，gは年金があるために施設で充分な介護をしてもらえるが，nは専業農家で年金などが非常に少ないため，gのような充分な介護をしてあげることができなかったと嘆いた。pは，oが野良仕事の合間に，nの食事の世話や入浴の世話をしていたために，つききりで世話ができなかった

こと，そうしているうちに入院し，最後は病院で亡くなったことを良しとはしていないようだ，とみている。また，nが入院当時，sも難病に罹り発病してからは，入退院を繰り返していた。sの面倒はrや夫婦の子どもたちが中心にみていたが，そうしたこともあって，oはnに対する介護を充分にしてあげられなかったと，悔んでいたようだという。介護については拙稿[6]を参照されたい。nの葬儀には，『御葬儀記録帳』によると，131名の参列者が確認できる。

sは2009年12月50歳で亡くなった。nと同じJA系の葬祭場で通夜・告別式を営んだ。sの葬儀の折にも，中学の同級生が弔辞を読んでくれた。参列者は135名であった。nもsも葬斎場で行ったため，告別式が終わって自宅に遺骨を持ち帰り，祭壇に安置して花・菓子・餅などの供物を供え，その前でrの兄姉夫婦や子どもたち，母親と軽く食事をし思い出話などをして解散した。sもお骨は四九日の供養後に墓に納めた。

なお，X家の三人の場合も，既に述べたように告別式に先立って火葬場に行き，遺骨を祭壇に安置して告別式を行う骨葬であった。

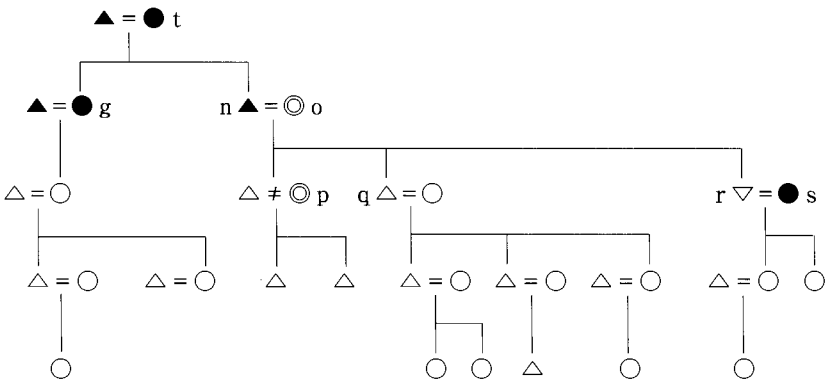

図2　X家（黒は調査時点で既に死亡。◎▽は話者）

❹……長野市におけるW家の場合

1）W家の場合

W家は長野市街地の東，駅から徒歩30分位の場所に位置するY集落の中に位置する。1960年代ごろまでは，戸数40数戸の純農村地帯であったが，現在は宅地化が進み，世帯数は5～6倍に膨れ上がっている。A・B・C・W姓などが同族集団の基本的な単位となって冠婚葬祭を行い，それらのつきあいに加えて，擬制親子（親分・子分と呼ぶ）関係が複雑に交差し，更に行政組織の組が存在している。

ほとんどの同姓が隣りムラのS福寺の檀家で（浄土真宗），葬式はこの寺が中心となって行う。葬儀はこの旦那寺（土地の人々は本坊と呼ぶ）の住職と寺内（じない）と呼ばれる塔頭に準ずるニ寺の住職の三人で行うことが多く，年忌供養になると寺内のどちらかを依頼する。

W家はY集落の中では旧家といわれており，過去帳によればコで二十数代目といわれている。集

落内には5～6代前に分家した家ニ戸と1950年代半ばに分家したカ家があるが，そのほか集落内の多くの家がア夫婦およびウ夫婦の擬制子となっており，W家に冠婚葬祭があると，同姓の家々と擬制子たちが夫婦で集まるので，1950年代ごろまでは，手伝いのものだけで50人を下らなかったという。W家の家族構成は図3である。

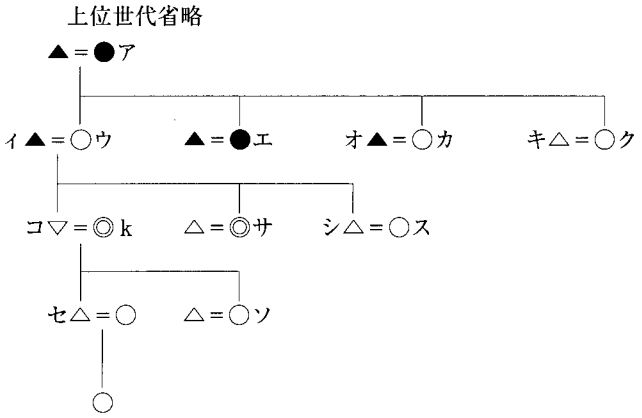

図3　W家の構成

図註

ア＝W家から徒歩30分ほどの場所に位置するムラの旧家からとついだ。1976年3月没

ウ＝W家の長女として生まれ，家を継いだ。ウの夫はいわゆる西山と呼ばれる地域のあるムラから婿養子として婚入した。ニ男・ニ女をなしたが，長女は戦後のもののない時代に肺炎になり，3歳で亡くなった（表には記述していない）。

エ・ク＝それぞれ市内に婚出し，エには長女と長男，クには長男・次男がいる。

カ＝生来我儘だったので嫁に行っても務まらないだろうとア夫婦が判断し，生家の近くに分家させ，オを婿養子として迎えた。子どもは嫌いだということで産まなかったという。

サ＝1971年，市内の兼業農家に婚出。夫と父親はサラリーマン。母が中心になって農業をおこなっていた。長男・次男がおり，現在は双方とも結婚して他出している。

シ・ス＝1976年結婚。W家から5分程のW家の土地に分家。長女がいたが病のため急逝。

アの夫は1962年に，アは1976年3月に死亡した。アの夫の葬儀や年忌供養の折には，前述のように本分家を中心にした同姓と擬制子たちが手伝いに来ていたが，1972年家を新築した折，新築の家を披露すると同時にアの夫の13回忌を一緒に執り行った。この折，招待したのは，アの夫の兄弟姉妹（代替わりして甥などが後を継いでいる家もあった）・アの兄弟姉妹・ア夫婦が親分（仲人）となっている擬制子たち・イの生家・ウの姉妹夫婦・ウの擬制子たち（これがお勝手を切り回した）・サ夫婦と子どもおよびシ・kの生家両親等40数人に及んだ。

このあたりでは，葬儀の手伝いはマキと呼ばれる同姓と，擬制子たちが葬家の主や主婦と相談しながら，寺との交渉・役所への手続き・お勝手を廻していく。Z家のある地域では，葬家の主婦などがお勝手に顔を出すことを嫌うがW家の地域は反対で，主婦が中心となってお勝手などを回さな

ければならないので，ウは自分の親の葬儀の折，火葬場にも行けなかったという。葬儀の日のオトキと呼ばれる精進落としの膳は，アの葬儀の頃から農協や近くの仕出し屋に依頼し，家ではその膳を補うサラダ・煮物・おひたしなどを作るようになったので，多少楽にはなったが，それでも主婦や嫁は座敷に落ち着いて座っているというわけにはいかない。客の接待は亭主役と呼ばれる役を，本分家の男性たちが務めることが多い。手伝ってくれた擬制子や本分家の女衆には，葬儀が終わり客が帰って，片付けが一段落した時点で「ご苦労呼び」をして慰労し，エプロンや肌着などをお礼として渡した。昭和30年代までは，この「ご苦労呼び」を葬儀の翌日行っていたというが，1972年の時点では葬儀や年忌供養が終わった当日に行い，依頼する方もされる方もなるべく負担をかけないような工夫がされるようになった。

W家では，前述の家の新築披露とアの夫の年忌供養を行った際，このような人寄せの規模は今後若い世代に負担をかけると考え，ア夫婦の擬制子との付き合いを先ず切ることを決め，当日，亭主役がその旨を家の主に述べさせて，以後，葬儀の折などにもツゲ（連絡）は出さないことにした。こうしてW家の付き合いは32～3人に減らすことができた。更に1978年，アの三回忌法要が行われたが，これを機にアの夫とアの兄弟姉妹との付き合いを整理している。アもアの夫の折も既にこの地域では火葬となっており，その手順はざっと以下のようなものである。

臨終⇒北枕に寝かせ刃物を置く⇒枕飯・枕団子等を枕元に供える⇒通夜は死者の親族が遺体のそばに寝て，一晩中ローソク・線香の灯を絶やさないようにする⇒湯灌荒縄をたすき掛けにして男性が行う⇒納棺⇒告別式⇒出棺⇒火葬場⇒遺骨を床の間に安置し，花・お膳・線香などを供える⇒翌日善光寺へ骨開帳・旦那寺へ寺参りに行く（アは善光寺の骨開帳と寺参りとも行ったが，イは寺参りのみ行った）⇒四九日に親族だけ集まって供養をし，墓に納骨する（骨だけ土に返し，壷は寺に置いてくる）

以上が，死から納骨までのおよその手順である。

イは2000年夏に死亡。脳梗塞で倒れて以来の長患いで，病院を転々としていたので，死亡後はまず家に連れて帰った。入院当初，イは家に帰りたがっていたのでウは一晩だけでも家で過ごしてから送りだしたい，とかねがね希望していたためである。通夜はウ・コ・サ・kなどが遺体に付き添い，一夜を過ごした。翌日午前中の納棺は，特に体を拭き清めるという程のことはせず，顔などを拭くぐらいで，いわゆる湯灌は形だけ行った。棺の中には生前好きだった書物やメガネなどを入れ，遺体の周りを花で飾った。この後，遺体を近くの葬祭場に運び，告別式が行われた。故人は定年退職後すでにかなりの年月が経っていたが，世話になったという後輩たち，ムラ内の異なるマキ，隣近所，妹夫婦や子どもたちの勤務先の関係者等が参拝して，その総数は300人を越した。W家のある地域では，告

写真6　アの葬儀の祭壇
W家で行った最後の自宅葬である。1976年

別式を済ませて火葬場に行くので，オトキ（精進落とし）の席に着く人の人数は限られ，ツゲをする時にオトキの席に着くべき人にはついてくれるように知らせるため，席のつき方はZ家の地域とは異る。イのときには，一人一人膳が準備され，膳には席札（名前が書いてある）がつけられていた。イの葬儀は告別式が終わると続いて初七日の法要も行われ，遠くの親族が何度も足を運ばなくていいように省略された形となっていた。告別式の翌日は遺骨をもって寺参りに行き（葬式当日に行う場合もあり，行う日は住職との相談で決まる），旦那寺の本堂祭壇に遺骨を飾って，住職にお経をあげてもらって帰った。

四九日はイの生家（イの姪とその子どもが出席）と子どもたち，アの姉妹などが参列して行われ，骨壷から出された骨だけが墓石の下の土に返された。

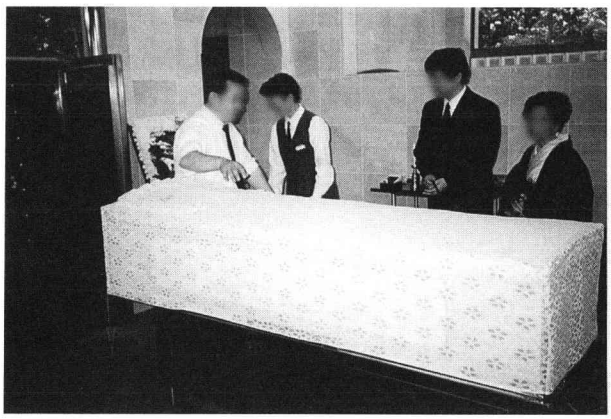

写真7　火葬場 2000年

写真8　寺参り 2000年

2）W分家の場合

アやイのような葬儀手順はこの地域のほぼ一般的な行われ方であるが，近年，子どもがない場合などの葬儀も見られるようになったので，以下にその一例をあげておきたい。

W分家のカは1950年代に婿養子を迎え，生家（本家と呼んでいるので，以下本家）の近くに分家をしてもらった。屋敷つきで家を建ててもらい，オ・カ夫婦で暮らしていた。共働きであったが，オは仕事の休みには本家の田畑の仕事を手伝い，W家もオの労働力はありがたく，特にイが自宅から通えない場所に転勤していた時代は，オの労力は農作業を維持していく上でなくてはならないものであった。

オ・カ夫婦には子どもがなかったため，ア夫婦は行く末を心配し，シを夫婦の養子として縁組をした（大晦日に盃をかわした程度で戸籍に登録してはいない）が，数年後この夫婦にいろいろな問題が持ち上がり，この養子話は白紙に戻された。したがって，この後夫婦は子どもがないまま年を重ねることになった。

2005年頃からオが運転する車がしばしば小さな事故を起こすようになったり，隣組で集金した

お金がなくなったなどということを，隣家に訴えていくようになった。カも「うちのおじさんがいなくなっちゃった」などと言って，夫婦が痴呆の症状を見せ始めた。2007年になるとその症状がかなり進み，隣家では「火が心配だ」と訴えるようになった。そこで，キ・ク夫婦が面倒を見て家から近い施設に入所させることになった。ウは既に体力がかなり落ち，寝たり起きたりの日々であったし，エは既に亡くなっていたので，キ・クが面倒をみるしかなかった。幸いだったのは，キ・ク夫婦の次男の連れ合いが看護士であったため，情報通であり施設入所の手配も彼女のアドバイスによって行うことができたことであった。医療つき特別老人ホームに，夫婦で入所することができた。連絡先等もキ・ク夫婦のところを登録した。

以後，キ・ク夫婦が一月に何回か施設に行って様子を見，甥や姪に様子を知らせてくれていた。

入所中，たまにはキ・ク夫婦の家に連れ帰って数日を過ごさせることもあったというが，オの体力低下が激しく，2010年12月死亡した。

エの長女（婚出）が葬儀会社に勤務しているため，キはすぐに連絡し，葬儀一切の手配を依頼し，全てを葬祭場で行おうことにした。カはこの時点でかなり痴呆が進み，自分の夫が亡くなったこともあまり理解できなかったので，告別式にだけ参加させることをキ・クが判断。通夜には参加させなかった。通夜は葬斎場の一室で行われ，キ・ク夫婦が遺体に付き添った。オの兄弟姉妹は既に皆死亡しており，代替わりしているので通夜に参列しただけで帰って行った（ほとんどが車で20～30分位の範囲内に居住）。

キ・ク夫婦は通夜も告別式も近親者のみで行う（オ夫婦の兄弟・甥・姪のみ）ことにし，後継者がいないので，香典も辞退することとした。喪主はカの妹の夫であるキが行うことになったが，葬儀当日までそのことはあまりはっきり決めておらず，本家の当主シに依頼したが「今まで面倒を見てくれたのだから，今日もおじさんにお願いしたい」という意向でキの夫が務めることになった。

告別式は本家に立ち日などの供養に来てくれている寺内の僧一人だけとし，初七日にはお骨を善光寺の裏にある無縁塔に納めることを参列者に伝え了承された。アは生前，カに「お前たちは子どもがいないんだから，亡くなったら本家のお墓に入れてくれるよう頼んでおけ」と度々言っていたが，その助言には従わずシに対して何も言っていなかった。また，シもコの勤務のつごうにより家を継いだが，後を継ぐべき長女が1998年急逝してしまったため，現在W家自体，今後どうなっていくのかが分からない状況である。したがって，W分家の遺骨を引き受けられる状態にない。キ・ク夫妻はそうした状況をみて，無縁塔に納めるのが一番良い方法と考えたのだという。

なお，告別式終了の数カ月後，オの遺産相続処理がキ・ク夫婦が中心になって行われた。クは，ややこしいことは全て片付けたつもりだが，姉（カ）が残っていることが気がかりだと，カの行く末を心配している。

終わりに

以上，長野県の中信地域に暮らしたZ家を中心に，そこに繋がる家々の葬儀をめぐる家族や介護・看取りにあたる人々の動きの変遷を概観してきた。事例数が十分ではなく，日本全体に及ぶ問題を抽出して分析することはできにくいかと思われる。しかし，高度経済成長期を挟んだ約60年にわ

表 1　葬儀関係内容一覧

		Z家	Z家	Z家	Z家	Z家	Y家	Y家	X家	X家	X家	W家	W家	W分家
		b	c	d	f	g	e 夫	e	t	n	s	ア	イ	オ
性		女	男	女	男	女	男	女	女	男	女	女	男	男
死亡年		1955 年	1964 年	1973 年	1976 年	2008 年	2007 年	2008 年	1985 年	2007 年	2009 年	1976 年	2000 年	2010 年
宗派		神葬祭	神葬祭	神葬祭	神葬祭	神葬祭	神葬祭	神葬祭	真言宗	真言宗	真言宗	浄土真宗	浄土真宗	浄土真宗
臨終場所		自宅	自宅	自宅	病院	特養	特養	病院	自宅	病院		自宅	病院	施設
介護者		家族	家族	家族	妻 g	職員	職員	職員	家族	職員		家族	職員	職員
看取り者		嫁 d	家族	家族	家族	医者	職員	医者	嫁 o			家族	職員	職員
通夜場所		自宅	自宅	自宅	自宅	葬斎場	葬斎場	葬斎場	自宅	葬斎場	葬斎場	自宅	自宅	葬斎場
葬儀場所		自宅	自宅	自宅	自宅	葬斎場	葬斎場	葬斎場	自宅	葬斎場	葬斎場	自宅	葬斎場	葬斎場
葬法		土葬	火葬	火葬	火葬	火葬	火葬	火葬	火葬	火葬	火葬	火葬	火葬	火葬
納骨		告別式―埋葬	火葬―式―納骨	火葬―式―自宅―納骨	火葬―式―自宅―納骨	火葬―式―自宅―納骨			火葬―式―納骨	火葬―式―自宅―納骨	火葬―式―自宅―納骨	式―火葬―自宅―納骨	式―火葬―自宅―納骨	式―火葬―納骨
葬儀集団		庚申講	隣組	擬制子	隣組	―	―	親族	隣組	隣組		同族・擬制子	同族・擬制子	―
告別式場		自宅	自宅	旅館	旅館	葬斎場	葬斎場	葬斎場	自宅	葬斎場	葬斎場	自宅	葬斎場	葬斎場
会葬者	家族	家族	家族	家族	家族	子供・孫夫婦	養子							
	親族	親族	親族	親族	親族	弟妻とその子	兄弟とその子，甥姪	兄弟とその子，甥姪						
	姻族	姻族	姻族	姻族	姻族	義弟の子，義子の兄弟	―							
	地域		旧居住地	旧居住地の同族	旧居住地		隣家							
	職場	孫の勤務先	子の勤務先		職場		―							
	その他	子孫の擬制親	擬制親	擬制親子	擬制親子	擬制子	ゲートボール仲間	擬制子						
			俳人・知人		友人・知人									
会葬者数		127 名	約 200 名	195 名	250 余名	30 余名	20 余名			131 名	135 名		300 余名	
斎食場		自宅	自宅	旅館	旅館	葬斎場			自宅	葬斎場	自宅	自宅	葬斎場	
儀礼		死水							死水・嫁 o			死水		
		魔除け刀							魔除け刀			北枕		
		知らせ										魔除け刀		
		枕飯・枕団子				(枕飯・枕団子)			枕飯・枕団子			枕飯		
		湯灌	湯灌	湯灌	湯灌				湯灌			枕団子		
		納棺	納棺	納棺	納棺	納棺			納棺			通夜	通夜	通夜
		通夜	通夜	通夜	通夜	通夜式・通夜	通夜		通夜	通夜式	通夜	湯灌	(拭く)	
		告別式	火葬	火葬	火葬	火葬	火葬		火葬	火葬	火葬	納棺	納棺	告別式
		野辺送り	告別式	告別式	告別式	告別式	告別式	告別式	告別式	告別式	告別式	告別式	告別式	
		埋葬	納骨	精進落とし	忌中払い		精進落とし	精進落とし	野辺送り	初七日法要		出棺	(初七日の法要)	
		精進落とし							納骨			火葬	出棺	
		初七日							精進落とし	忌中払い	親族で食事	骨開帳	火葬	
		墓参り・供養		(お骨は自宅に祀る)	(お骨は自宅に祀る)	(お骨は自宅に祀る)				(お骨は自宅に祀る)	(お骨は自宅に祀る)	寺参り	オトキ (精進落とし)	
		四十九日		五十日祭	五十日祭	五十日祭・新盆				四十九日の法要	四十九日の供養	納骨	寺参り	
				納骨	納骨	納骨				納骨	納骨		(お骨は自宅に祀る)	
													四十九日の法要	
													納骨	

表２　葬儀関係内容一覧　時代順

		性	時代	宗派	臨終場所	介護者	看取り者	通夜	葬法	葬儀集団	告別式場	会葬者
Z家	b	女	1955年	神葬祭	自宅	家族	嫁d	自宅	告別式―土葬	庚申講	自宅	子供・孫・曾孫・甥・姪・従兄・姻戚・擬制親・他
Z家	c	男	1964年	神葬祭	自宅	家族	家族・親族	自宅	火葬―告別式―納骨	隣組	自宅	子供夫婦・孫・姉妹・甥・姪・従兄・姻戚・擬制親・他
Z家	d	女	1973年	神葬祭	自宅	家族	家族	自宅	火葬―告別式―自宅―納骨	擬制子	旅館	子供・孫夫婦・曾孫・甥・姪・従兄・姻戚・擬制親子・本分家・他
Z家	f	男	1976年	神葬祭	病院	妻	家族	自宅	火葬―告別式―自宅―納骨	隣組	旅館	子供・兄弟姉妹・甥・姪・従兄・姻戚・擬制親子・知人・他
W家	ア	女	1976年	浄土真宗	自宅	家族	家族	自宅	告別式―火葬―自宅―納骨	同族・擬制子	自宅	
X家	t	女	1985年	真言宗	自宅	家族	嫁o	自宅	火葬―告別式―納骨	隣組	自宅	
Y家	e夫	男	2007年	神葬祭	特養	職員	職員	葬斎場		―	葬斎場	弟姉妹・甥・姪・姻族・従兄・隣家・仲間・他
X家	n	男	2007年	真言宗	病院	職員		葬祭場	火葬―告別式―自宅―納骨	隣組	葬祭場	
Z家	g	女	2008年	神葬祭	特養	職員	医者	葬祭場	火葬―告別式―自宅―納骨	―	葬祭場	子供夫婦・孫夫婦・曾孫・兄弟・甥・姪・姻族・擬制子・他
Y家	e	女	2008年	神葬祭	病院	職員	医者	葬斎場		親族	葬斎場	弟姉妹・甥・姪・姻族・従兄・他
X家	s	女	2009年	真言宗				葬祭場	火葬―告別式―自宅―納骨		葬祭場	
W家	イ	男	2000年	浄土真宗	病院	職員	職員	自宅	告別式―火葬―自宅―納骨	同族・擬制子	葬祭場	親族・同族・姻族・擬制子・村内・生前関係者・他
W分家	オ	男	2010年	浄土真宗	施設	職員	職員	葬祭場	告別式―火葬―納骨	―	葬祭場	近親者

たって一人の女性話者（勿論，関係者何人かの助力によって報告は構成されている）が，長野県という一地方に限られてはいるが，その体験し関わった葬儀の様子を概観ることは，葬儀の変遷の貴重な証言であり，葬儀の変遷を考えるうえで無意味ではなかろう。それは，あるいは日本全国に及ぶ変化の一類型を示しているのかもしれない。

ここで取り上げた13例を一覧表に整理したものが表1　葬儀関係一覧である。表2は更にこれを年代順に並べ，葬法・葬儀集団・式場・会葬者などを加えたものである。これを見ると，1980年代を境にして大きな変化がみられることがわかる。

以下に，二つの表から読みとれたいくつかのことを列挙してみた。

①臨終の場所が自宅から病院や施設に変化している。

②自宅で臨終を迎える時には，介護者も看取り者も家族である。

③その場合は通夜も葬儀・告別式・斎食も自宅で行われる。

④葬儀集団はそうした傾向にはかかわりなく，2000年初め頃まで地域集団や親族などが中心になっている。

⑤土葬あるいは火葬になった当初は，告別式が済むと直ちに埋葬・納骨をしている。

⑥しかし，火葬になると遺骨をいったん自宅に持ち帰り，五十日祭，あるいは四十九日の法要が済んでから納骨するようになる。

⑦2000年以降葬斎場の使用が増えると，通夜・葬儀告別式・斎食などは葬斎場で行われるようになる。

⑧2000年以降，臨終を病院や施設で迎えるようになる。

⑨臨終を病院や施設で迎えるようになると，必然的に看取り者は医者，介護者は施設の職員になる。

⑩嫁をはじめ，家族はできるだけ介護し，死水を取ろうとしている。

⑪会葬者は，家族・親族・姻族が中心であることには変わりないが，地縁関係が少なくなり，家族の職場関係者が多くなっている。

⑫かつては祖父母の兄弟姉妹あるいはその上位世代の親族等，死者は喪主と関係が遠い親族まで参列しているが，近年，そうした関係をある世代で切ってできるだけ近い関係者に限定しようとする傾向がみられる。

⑬通夜・火葬・告別式を行うことに変わりはないが，その他の儀礼はほとんど行われなくなる傾向がみられる。

⑭火葬して告別式を行うか（骨葬），告別式の後で火葬するかという地域的な相違には年代による変化がみられない。

⑮葬儀の執行手順やその変遷に宗派は関係がない。宗派は告別式の祭祀のお経や祝詞の違いこそあれ，全体の手順は地域の習俗にしたがって進められるものであることが分かる。

表1・2からは以上のようなことが読みとれるが，このほか事例の中で少しふれられているが，納棺師による死者へのエンバーミングなどを行ってもらうことが死者を丁寧に扱っていることになるという考えが出てきている。一方，結局は誰だかわからない仕上がりなるなど，死者を大切に扱うことの意味にも変化がみられる。死者は果たして他人に触れてもらい「美しくして」もらうこと

を望むだろうか。また，近年の傾向として，出棺に際して参列者に「最後のお別れを」促すことが一般的になっている。参列者の中にはいわゆる義理で出席していて，死者と初めて対面するという人もいるし，それほど親しくない人もいる。「最後のお別れ」は，こうしたことをすることによって，繰り返し死者への別れを惜しんでいる気持ちを表そうとしているのであろう。しかし，一方では告別式に続いて初七日の法要を執り行うなど，全体として儀礼は省略され，葬祭業者のタイムテーブル通りに進んでいく。こうした変化をみると，葬儀は誰のために何のために行われるのかを，改めて考えさせられる。死者の肉体と霊魂を送るべきところに送るよう，手順を踏んで，一定の時間をかけて段階的に送る，というかつての意義は薄れ，偏に生者の都合によって行われていることが見えてくる。だからこそ，どのような看取りができたか（したか）ということが，死者を送った後も残された生者にとっては重要な問題となっていることが分かる。せめて生きているうちに残された者が納得できるように，充分手を尽くしたと思える介護をしたい，という望みも強く残るのであろう。「住み慣れた地域＝家で安心して　いつまでも暮らし続けたい」という在宅介護の理想は，事例の2000年以降の傾向をみると，それが最後の看取りの部分まで継続しない　あるいはできないことは明らかである。

また，仕方なく入院させたり，施設に入れたりすることを良しとしてはいない意識も根強く残っていることも読みとることができる。それは臨終の場所がどこであるかによって，葬儀のあり方とも大きく関わることを人々は無意識のうちに意識していることを指摘しておきたい。

以上，かなり個人的な部分に踏み込んだ話を聞かせていただいた話者の方々に篤くお礼を申し上げ，謝辞としたい。また，このような共同研究の機会を与えていただいた国立歴史民俗博物館の関係者の方々にも，謝意を表する次第である。

註

（1）――eは1948年ごろiを養子としたが，iの結婚を機に養子の話は解消された。結婚相手に不足があったためという。しばらく養子の話は出なかったが，e夫婦が60歳代になったころ，eの本家筋の娘の子供を養子とし，親戚等に大々的に披露した。昭和時代の終わりごろのことである。しかし，同居はせず，養子は東京で仕事を続け，実の親たちと同居していた。最初のうちは盆・暮にはe夫婦と共に過ごしたが，仕事が忙しいことを口実に，親たちが代わりにやってきていた。そのうち，eの夫が実弟に事業資金を融通し，それが借金として残ってしまったことを契機に，養子との縁は断たれてしまった。借金を抱えて苦しんでいる養父母を助けなかったことが，親族の怒りを買い，e夫婦に養子との縁を切るように勧めたからである。借金問題はUが解決してくれて片付いたが，e夫婦に財産がなくなったことによって，養子は全く寄り付かなくなってしまったという。ただ，仮にも親子の縁を結んだことだからと，死亡したことだけは伝えた。Uもその姉妹たちも来る来ないは本人の意思であり，知らせるだけは知らせたということであった。

（2）――aの折の音信帳の後についている記録によれば，神官には面引（羊羹・林檎・中板・天麩羅・頭付）三盛（よせ　蜜柑　竹○＝ちくわ）刺身（こんにゃく）丼（豆腐　漉花菜＝ひじき　里芋）皿（あげ）大平（麩　椎茸　人参）吸物（海苔　白瀧　花巻）平（油あげ）皿（切身　ます）台引（大阿げ）飯　汁　引物　が出されている。一般の客には三盛（阿げ　蜜柑　田作　よせ）丼（豆腐　里芋　漉尾花＝ひじき）　刺身（蒟蒻）　皿（あげ）が供されている。また，これらの献立に要した角天，生阿ん，中板，花巻，頭付，竹○，ひじき，乃り，ふ，志いたけ，志らたき，さけ，田作，切いか，菊ゆば，可らし粉，はし，うす板，味出し（削節）青コなどは松本市内の魚屋で購入していることが分かる。このほか，野菜や果物，白の半もすなどの布類，水引や線香なども松本まで行って購入している。通い帳で買い求め，葬儀後清算するのが一般的なやり方であったが，購入・支払いの方式は現在も受け継がれている。

(3)――Z家などが所属する講は庚申講とよび，隣組と構成員が重なっている。この講は日常的な付き合いと同時に，冠婚葬祭には欠かせないメンバーとして認識されていた。この講の付き合いに関しては拙稿「ムラ組における庚申講の役割」『長野県民俗の会会報』8　1985年に報告した。また，儀礼の折の献立等に関しては拙稿「祝儀・不祝儀献立控―献立からみたムラのつき合い―」『信濃』38-1　1986年などがある。

(4)――拙稿「祭―家族の分化と祭の変容と―」『人文学フォーラム』9号　跡見学園女子大学人文学科　2011年および「葬儀の拡大化と縮小化―長野県松本市郊外の農家の『音信帳』から―」『人文学フォーラム』10号　跡見学園女子大学人文学科　2012年　参照

(5)――Y家もZ家同様神葬祭である。通夜には神主が一人，告別式には神主が3人きた。Y家は決まった神主を頼んだりすることがなかったので，Uの懇意にしている神主を頼んだ。通夜はUとその妻が付き添った。葬式の手順は以下の通りである。

施設についている病院で死亡＝Uとその妻が臨終に立ち会った。

遺体は病院から葬祭場の通夜室に移動

この間にUは電話で死亡を通知。市役所などへの届けは葬祭業者が代行する。また，新聞＝信濃毎日新聞や市民タイムスなどへの掲載も葬儀業者が代行する。eの夫の場合は，市民タイムスに掲載してもらった。

神主に連絡し，通夜・告別式の日程を決める（かつては，隣組の人々が葬家の希望を聞いて，葬式の規模なども考えたが，現在は葬儀会社が提供する人数と値段で折り合いをつける。いつも依頼している寺や神主がない場合は，葬儀会社が宗派などを聞いて，見つけてくれる。Uの場合は知り合いの神主に依頼）

通夜はUとその妻で行った＝通夜の出席者はUの姉妹夫婦たちとその子供，eの夫の兄弟（亡くなっている場合は甥や姪），隣組の特に親しくしていた家，eの従兄妹などであった。

翌日，午前中に火葬場に行き，13時から告別式が行われた。通夜に参列した親族のほか，ゲートボールの仲間や隣組の特に親しくしていた家，gの実家，eの妹の嫁ぎ先の本家などが参列した。ただし，告別式に参列した人たちが全員精進落としにも出席したわけではなく，各自の判断で精進落としには出席せずに帰る人もいた。

また，告別式には「弔辞」が読まれることがあるが，eの夫の場合，弔辞はなかった。遺族が頼まなくても，弔辞をあげさせてくれ，といって個人と生前親しかった人が準備してくる場合もあるが，eの夫の場合はいずれもなかった。

告別式が終わると，忌中払いの席に移動し，遺骨に献杯をした後飲食して故人の思い出話などをして時を過ごす。だいたい1時間半から2時間ぐらいでお開きとなる。神主や坊さんが席を立てば，他の人たちも随時帰っていく。

(6)――介護を女性たち，特に嫁と呼ばれる女性たちがどのように感じ捉えているかは拙稿「嫁のつとめ―看護と看取り―」『フォーラム』18号　跡見学園女子大学文化学会　2003年を参照されたい。

資料1　明治期の音信帳　Z家aの父の事例

明治16年10月24日出棺の『音信帳』

	香典　品物	名前	死者との関係	住所	備考
1	金二銭　米二升	■■右エ門	ムラ内		同姓
2	米三升	川野徳太郎			
3	金五銭	百瀬猪蔵			
4	米三升	百瀬泰蔵			
5	米二升	■■政治	ムラ内		
6	米二升	▲▲彦治郎	ムラ内		
7	金壱銭　米壱升	■■幸吉	ムラ内		同姓
8	行器	上条仙治郎	ムラ内		
9	粉壱升	百瀬政市	ムラ内		
10	金拾銭　行器	古幡順左ェ門	ムラ内		
11	米三升	中村庄作			
12	金五拾銭　行器	■■新五左エ門	ムラ内		同姓
13	金参銭六分　粉壱升	■■源吉	ムラ内		同姓
14	金参銭六分　行器	并松幾三郎			
15	金弐銭　米参升	■■八三郎	ムラ内		同姓
16	金参銭六分　粉壱升	■■舞吉	ムラ内		同姓
17	金三拾銭　強飯壱升	酒井善吉	ムラ内		
18	金壱銭　御備	■■喜次郎	ムラ内		同姓
19	金弐拾銭　行器	■■七兵衛	ムラ内		同姓
20	金弐銭　粉壱升	■■九郎右エ門	ムラ内		同姓
21	米弐升	■■米吉	ムラ内		同姓
22	米弐升	百瀬七之丞			
23	米壱升	▲▲徳左エ門	ムラ内		
24	行器	川野権蔵			
25	粉壱升	上条磯右エ門	ムラ内		
26	金拾銭	古町泰次郎	長男嫁の生家の関係	小屋村	
27	金弐拾銭	古町文三郎	長男嫁の生家の関係	小屋村	
28	金三拾銭	古町澤次郎	長男嫁の生家の関係	小屋村	
29	金弐拾銭	宮嶋幾弥		小屋村	
30	金弐拾銭	宮嶋竹次郎		小屋村	
31	金拾銭　行器	中野善六		洗馬村	
32	金拾銭	百瀬牧蔵		元洗馬	
33	金三拾銭	百瀬福次郎		不明	

34	金弐銭四分	百瀬善太郎		不明	
35	金弐拾銭	米久保源左エ門		内田	
36	金参拾銭　行器	大野音弥	妻の生家の関係か	大月耕地	
37	金弐拾銭	宮林民弥		出川町	
38	金弐銭　粉壱升	▲▲関弥	ムラ内		
39	金参拾銭	土田亀		内田	
40	金弐銭	百瀬五郎兵衛			
41	金三銭弐分	百瀬兵左エ門			
42	金弐銭	上条橘吉			
43	金四銭	伊藤槇造		新田	
44	金四銭	伊藤嘉三エ門			
45	金弐拾銭	池田若十		内田	
46	金一銭六分	▲▲権之丞	ムラ内		ここからはムラ内と思われる
47	同	▲▲菊右エ門	ムラ内		
48	同	▲▲良右エ門	ムラ内		
49	同	▲▲辰次郎	ムラ内		
50	同	▲▲清吉	ムラ内		
51	同	▲▲民之助	ムラ内		
52	金壱銭六分	酒井安次郎	ムラ内		
53	同	▲▲沖左エ門	ムラ内		46～ここまで下村か
54	金五拾銭　行器	高山富三郎		高松村	
55	菓子一	横林山桃昌寺	旦那寺		
56	金拾銭　素麺三把	塩沢山法舟寺	ムラ内　真言宗		
57	金壱円　御備餅	■■兵右エ門	ムラ内　本家か？		同姓
58	金五拾銭　行器	山本伊扇治		埴原	
59	金弐銭	▲▲歌蔵	ムラ内		
60	弐拾銭				名前の記述なし　大寶現がそうめんとともに持参したものか？
61	そうめん三把	大寶現			御講の肩書あり
62	天保弐枚	双松由兵衛	ムラ内		
63	そうめん三把	中山固金治		内田	

資料2　昭和五十一年 音信帳より f の葬儀の参列者。資料1の曾孫にあたる。

	香典　品物	氏名	f との関係	住所	備考	g 葬儀参列者
1	三万円	■■喜満夫	弟	栃木県	親族	夫婦とも死亡
2	三万円	△△庄司	姉夫	東京	親族	夫婦とも死亡
3	五万円	▼▼明	妻生家	松本市	親族	弟は死亡　妻が出席
4	三万円	△△△芳人	妹夫	松本市	親族	妻は死亡　本人出席
5	一万円	■■俊喜	弟　長男　甥	東京	親族	甥　海外在住　×
6	一万円	△△△勝	妹　三男	松本市	親族	○
7	一万円	△△△清志	妹二男	埼玉県	親族	8に依頼　×
8	一万円	△△△和水	妹　長男	松本市	親族	○
9	一万円	▽▽今朝平	姉夫婦の擬制子	東京	妻は本家の次女	
10	一万円	▽▽定	2の従弟	東京	一時妻子が疎開していた	
11	五千円	△△△秀夫	妹の夫の本家	松本市	親族関係	
12	三千円	○○速郎	姉夫婦の家の職人	東京	親族関係	
13	五千円	○○技研工業所	妹の夫の勤務先	松本市	親族関係	
14	二千円	○○清次	9の従弟	川崎市	妻は本家の三女	
15	五千円	▼▼新治	3の分家　妻の従弟	松本市	親族関係	○
16	五千円	▼▼邦彦	妻の弟の長女嫁ぎ先。18の親　fとも仕事関係あり	生坂村	親族関係	
17	五千円	○○武子	18の姉	生坂村	親族関係	
18	五千円	○○和夫	3の長女の夫	松本市	親族	姪○
19	三千円	金児実	不明			
20	五千円	▼▼芳郎	甥　3の長男	東京	親族	甥○
21	五千円	○○喬夫	隣組の中で親しい家	市内	隣組	
22	千円	高木栄	不明			
23	千円	○○重一	隣組	市内	隣組	
24	千円	○番町睦会		市内	町会の親睦団体	
25	二千円	大島義弘	不明			
26	五千円	▲▲本広	2の兄	松本市	親族関係	
27	三千円	▲▲元一	2の甥	松本市	親族関係	
28	一万円	○○雅史	f 長女の夫の弟	長野市	親族関係	○
29	五千円	○○○武治	旧居住地の家に入った本家の長女：fの同級生の長男		本分家関係	
30	五千円	■■保亀	旧居住地関係	松本市	同姓	
31	千円	□□真一	旧居住地関係　同組	松本市		
32	一万円	■■勝一	旧居住地関係　同組	松本市	同姓　本家	

33	千円 御見舞五百円	○○博文	従兄弟の関係か	岡谷市		
34	千円	○○彦十	従兄弟の関係か	岡谷市		
35	千円	○○芳広	不明			
36	千円	○○○千枝子	不明			
37	五千円	○○綾登	友人	松本市		
38	一万円	□□嘉門	旧居住地　同組　擬制親	松本市	擬制親	擬制親　○
39	三千円	○○茂喜	元同僚	市内		
40	千円	○○健一	元同僚か			
41	三千円	○○文雄	元同僚			
42	五千円	○○保太郎	姪の嫁ぎ先	東京	親族関係	
43	千円	○○正男	元同僚			
44	二千円	○○征二	隣組	市内	隣組	
45	二千円	○○詔三	不明			
46	二千円	全逓　○○分会	職場関係	木曽郡		
47	二千円	○○伝	同僚	木曽郡		
48	二千円	○○正一	不明			
49	二千円	○○満久	同僚	木曽郡		
50	二千円	○○雄治郎	同僚	木曽郡		
51	二千円	○○○誠一	同僚	木曽郡		
52	二千円	○○英作	同僚	木曽郡		
53	二千円	○○貞雄	同僚	木曽郡		
54	二千円	○○利夫	同僚	木曽郡		
55	千円	○○千春	同僚	木曽郡		
56	二千円	○○良夫	同僚	木曽郡		
57	一万円	◇　忠男	叔母の夫（母妹）	松本市	親族	
58	三千円	○○富士子	従妹　57の長女	東京	親族	
59	三千円	◇　広充	従弟　57の息子	東京	親族	
60	一万円	◇◇昭博	従弟　57の甥	埴科郡	親族	
61	二千円	○○匡寛	旧居住地　同組			
62	三千円	□□琢雄	旧居住地	松本市		
63	五千円	○　成行	伯母（父の姉）の親戚	松本市	親族関係	
64	一万円	■■本明	旧居住地　親の擬制子	松本市	同姓	
65	千円	○○徹	旧居住地			
66	三千円	◇◇英	従妹	埴科郡	親族	

67	五千円	○○正治	2の弟	伊那	親族関係	
68	三千円	○○久治	元同僚	市内		
69	五千円	○○郵便局内有志	同僚	木曽郡	5人の名前あり	
70	千円	○○幸夫	同僚	木曽郡		
71	二千円	○○実	不明			
72	二千円	○○保	不明			
73	千円	○○一由	不明			
74	一万円	◇◇幸市	母の従弟	松本市	親族関係	
75	五千円	○○茂幸	不明			
76	千円	○○和明	不明			
77	二千円	○○豊三郎	不明			
78	二千円	○○清	元同僚	市内		
79	三千円	○○芳見	隣組	市内	隣組	
80	三千円	○○庭二	隣組	市内	隣組	
81	三千円	○○弘次	隣組	市内	隣組	
82	三千円	○○豊	隣組	市内	隣組	
83	三千円	○○仁	長女恩師	松本市		
84	二千円	○○幸男	不明			
88	三千円 御見舞二千円	○○一明				
89	三千円 御見舞三千円	○○栄一	長女夫婦仲人	松本市	長女の擬制親	
90	五千円	◇◇豊美	妻従兄弟	松本市	親族関係	
91	一万円	○○静渡	友人	市内		
92	三千円	○○○新也	元同僚			
93	三千円	い○た	妻の仕事先	市内	呉服屋	
94	一万五千円	○○重	文学上の恩師	伊東市		
95	千円	○○好人	日常的付き合い	市内	写真屋	
96	千円	○○範雄	不明	松本市		
97	三千円	○○正次	元同僚	市内		
98	三千円	○○清三	隣組　隣家	市内	隣組	
99	千円	○○啓司	不明			
100	二千円	五○会	不明			
101	千五百円	■■重男	旧居住地　同姓	松本市	同姓	
102	五千円	○○正一	64から妻をめとっている関係での付き合い　代議士	市内		
103	千円	○○久芳	不明			

104	千円	○○八郎	同僚	木曽郡		
105	千円	○○守	同僚	木曽郡		
106	千円	○○薫	不明	川越市		
107	千円	○○哲夫	不明	明科町		
108	三千円	○○寿作	隣組　隣家	市内	隣組	
109	三千円	○○虎之助	隣組	市内	隣組	
110	三千円	○○敏晴	隣組	市内	隣組	
111	三千円	○○修一	隣組　108の長男	市内	隣組	
112	二千円	○○儀平	不明			
113	五千円	○○初美	元同僚　家族ぐるみの付き合い	岡谷市		
114	千円	○○実壱	旧居住地	松本市		
115	千円	○○房芳	元同僚	松本市		
116	三千円	○○袈裟二	元同僚	市内		
117	二千円	○○晴敏	元同僚	松本市		
118	六千円 御供　米五キロ	○○正志	元同僚　擬制子　旧居住地	松本市	擬制子	
119	六千円 餅米五キロ	○○英智	元同僚　擬制子　旧居住地	松本市	擬制子	
120	三千円	○○太三郎	113の親　家族ぐるみの付き合い	市内		
121	五千円	○○武	よく利用する美容院	市内	美容室	
122	五千円	▲▲喜吉	2の甥　家族ぐるみの付き合い	伊那	親族関係	
123	六千円	○○増雄	夫婦とも元同僚　擬制子	市内	擬制子	○
124	二万円	隣組一同	10名の名前あり		隣組	
125	千五百円	■■三也司	旧居住地	松本市	同姓	
126	せんご	■■資起	旧居住地32の分家	松本市	同姓	
127	千円	○○茂春	不明			
128	千円	○○正文	不明			
129	千円	○○延	不明			
130	千円	○○治亀	不明			
131	千円	○○六雄	不明			
132	五百円	○○博	旧居住地	松本市		
134	二千円	○○倍七	旧居住地	松本市		
135	五千円	◇◇忠雄	従妹	松本市	親族	
136	千円	○○博二	隣組	市内	隣組	
137	千円	○○善作	不明			

138	千円	○○寿雄	近所	市内	家具屋	
139	一万円	○○広司	弟妻の生家	東京	親族関係	
140	一万円	○○雄司	弟妻の弟	東京	親族関係	
141	一万円	○○三郎	姪夫	東京	親族	
142	一万円	◇◇深志	従妹	更級郡	親族	
143	三千円	◇◇憲司	従弟の長男（母の生家）	松本市	親族	
144	一万円	◇◇兵一	従弟（母の生家）	松本市	親族	
145	三千円	○○良三	不明			
146	三千円	○○昭平	同僚	木曽郡		
147	千円	○○重夫	旧居住地	松本市		
148	三千円	○○長司	同職の付き合い　別職場	松本市		
149	五千円	○○繁子	不明			
150	三千円	◇◇武	従弟	松本市	親族	
151	七千円	◇◇克人	従弟	松本市	親族	
152	三千円	○○栄市	母の従妹の長女夫	東京	親族関係	
153	三千円	○○国男	152の親か	東京	親族関係	
154	千五百円	■■正哉	旧居住地	松本市	同姓	
155	一万円	○○頼章	祖母の従兄弟の子	松本市	親族関係	
156	三千円	○○公恵	不明			
157	二千円	○○繁勝	母の従兄弟あるいはその子	松本市	親族関係	
158	三千円	○○智弘	長女の恩師　近所	市内		
159	三千円	○○正	不明			
160	三千円	○○浅五郎	118の親　旧居住地	松本市		
161	一万円	○○郡吾	元々上司　旧居住地　擬制親	松本市	擬制親	
162	千円	○○篤美	旧居住地	松本市		
163	千円	○○隆三	旧居住地	松本市		
164	千円	○○真	元同僚　旧居住地	松本市		
165	千円	○○武子	不明			
166	千円	○○道弘	旧居住地	松本市		
167	千五百円	■■正人	旧居住地	松本市	同姓	
168	千円	○○○均	不明			
169	二千円	○○茂雄	妻の従兄弟	松本市	親族関係	
170	千円	○○千明	旧居住地	松本市		
171	三千円	○○治人	旧居住地	松本市		
172	五千円	▽▽要人	長女の婚家の分家	長野市	親族関係	

173	千円	○○健児	旧居住地友人	市内		
174	千円	○○保貞治	旧居住地友人	市内		
175	千円	○○祥平	旧居住地同級生	市内		
176	千円	○○奈津子	旧居住地同級生	市内		
177	千円	○○鶴吉	旧居住地同級生	市内		
178	千円	○○治吉	旧居住地同級生	市内		
179	千円	○○潔	旧居住地同級生	市内		
180	二千円	○○政雄	同職の付き合い　別職場	須坂市		
181	二万円	▽▽直太	k婚家	長野市		
182	二千円 御見舞千円	○○福美	旧居住地同級生	市内		
183	七千円	■■栄徳	旧居住地　同姓	松本市	同姓	
184	五千円	○○尚久	元同僚	市内		
185	二千円	○○卓郎	元同僚	市内		
186	五千円	○○理三郎	従妹	神奈川県	親族	
187	千円	○○常市	旧居住地	松本市		
188	三千円	○○永	元同僚	市内		
189	二千円	○○久男	元同僚	不明		
190	千円	○○幸信	元同僚	市内		
191	二千円	○○清	同職の付き合い　別職場	木曽郡		
192	二千円	○○市太郎	同職の付き合い　別職場	木曽郡		
193	一万円	○○南部会	職場関係	木曽郡		
194	千円	○○民好	不明	諏訪市		
195	三千円	○○○貞美	不明			
196	三千円	○○義晴	不明			
197	千円	○○佐久男	元同僚	市内		
198	五千円	○○秀雄	従姉	東京	親族	
199	一万円	○○俊一郎	従兄	岡谷市	親族	
200	一万円	▽▽梅野	k婚家　戸主の生家	長野市	親族関係	
201	一万円 玉串料二千円	▽▽孝男	k夫の妹	長野市	親族関係	k夫の妹○
202	一万円	▽▽勇	k夫の叔母	長野市	親族関係	
203	一万円	▽▽功	k夫の叔母	長野市	親族関係	
204	一万円	▽▽正一	k夫の叔母	長野市	親族関係	
205	三千円	○○養爾	元同僚	市内		
206	三千円	○○明	不明			
207	三千円	○○達雄	不明			

208	三千円	○○○曽門	元同僚			
209	三千円	○○恒男	不明			
210	千円	○○高	不明			
211	二千円	○○政郎	元同僚	市内		
212	五千円	○○藤一郎	2の姉の嫁ぎ先　2の甥	朝日村	親族関係	
213	二千円	○○清	不明			
214	二千円	○○吉五郎	元同僚	市内		
215	二千円	○○一夫	不明			
216	三千円	○○計子	不明			
217	千円	○○正吾	不明			
218	千円	○○良一	不明			
219	千円	○○恒文	不明			
220	三千円	○○浩人	不明			
221	三千円	○○茂夫	元同僚	市内		
222	二千円	○○○正雄	元同僚	市内		
223	三千円	○○○潭	不明			
224	一万円	○○督衛	従兄	上田市	親族	
225	五千円	○○渉	長女恩師　友人	波田町		
226	三千円	○○二郎	不明			
227	三千円	○○邦夫	不明			
228	千円	○○裕治	不明			
229	二千円	○○郵便局長	元職場			
230	一万円	伊藤○○○	従兄か	東京	名字と住所から従兄と思われる	
231	三千円	○○好弘	元同僚	市内		
232	二千円	○○英澄	不明			
233	三千円	○○正巳	k仲人	松本市	長女の擬制親	
234	三千円	○○壮平	不明			
235	五千円	○○節郎	2の甥	東京	親族関係	
236	千円	○○岩美	不明			
237	千円	○○耕作	不明			
238	三千円	○○弥麻治	2の兄弟の関係	朝日村	親族関係	
239	三千円	○○俊作	不明			
240	三千円	○○一明	妻gの友人家族ぐるみの付き合い	市内		
241	三千円	○○幸雄	不明			
242	二千円	山本典人	不明			

243	二千円	○○慶喜	旧居住地　同級生	松本市		
244	千円	○○太郎	不明	市内　吉田		
245	千円	○○貞子	不明　同級生か			
246	千円	○○貞夫	不明			
247	二千円	○○信郎	同僚	木曽郡		
248	二千円	○○富夫	長女の婚家の関係	長野市		
249	二千円	山田…記述なし	不明	町内		
250	三千円	○○周平	k夫　職場の上司	上田市		
251	五千円 御見舞二千円	○○頼之	祖母の従兄弟の子	松本市	親族関係	
252	三千円	○○武雄	出入の呉服屋	松本市		
253	千円	○○和喜次	同僚か	木曽郡		
254	五千円	○○光正	友人	東京		
255	二千円	○○英一	不明			
256	三千円	○○祐一郎	友人	東京		

個人名が特定できないよう，親族や姻戚関係の姓は記号で整理した。姻族や親戚の関係者あるいは友人・知人は○で姓を伏せた。

※資料1には63戸の記載があり，その訪れている範囲は葬家を中心に4キロから10キロの範囲である。この後，次第に参列者数は増え，bの折は127名，dが亡くなった1973年には195人となっている（この中には香典のみを預けたという人も数人含まれる）。資料2は1976年に亡くなったfの音信帳である。病気療養のためいわゆる60歳の定年を待たずに亡くなったこともあり，256人の参列者を数えることができる。Z家にとってはこの葬儀が参列者の一番拡大した時であり，kはこれを念頭においてgの葬儀のあり方を考えたという。

（跡見学園女子大学文学部，国立歴史民俗博物館共同研究員）

（2013年12月21日受付，2014年5月26日審査終了）

Bulletin of the National Museum of Japanese History
Vol. 191 February 2015

Changes in Funeral Practices before and after the High Economic Growth Period : Focusing on Families, Nursing Care of Parents, and Attendance on the Dying

KURAISHI Atsuko

Cremation was introduced to parts of Nagano Prefecture, such as Nagano City, in the 1930s, gradually spreading across the prefecture, though it did not reach some areas in the Central District, the focus of this research with the Z Family as a case study, until the 1970s. This introduction of cremation caused changes to the order of funeral procedures. In addition, around 1970, some households stopped asking community groups for help with funeral services and started to rent hotel rooms for such ceremonies. This shift from homes to funeral halls can be considered as a sign that funeral practices centered on community and kin groups started changing, driven by the intention of the chief mourners who did not want to bother them. Needless to say, behind this, there was also a social factor: a dramatic increase in white-collar workers and double-income families busy with working after the high economic growth period. Furthermore, after the 2000s, more and more people die in hospitals and nursing homes. In relation to the above mentioned transitions, this paper reports the Z Family in the Central District, Nagano Prefecture, and 13 families related to them by marriage as a case study to discuss changes in the form of family as well as other accompanying changes in nursing care of parents and attendance on the dying (the form of dying). As evidenced by this case study, while more and more people die in hospitals and nursing homes instead of their own homes, the venue for funerals is shifting, and the number of mourners has also begun to change. These trends indicate that it is time to question anew the essence of funeral rites to redefine for whom they should be designed.

Key words: nursing care of parents, attendance on the dying, vigil, washing of a dead body for burial, cremation, ashes of the dead